

詩篇64篇より

0 指揮者のために。ダビデの賛歌

- 1 神よ。私の嘆くとき、その声を聞いてください。
恐るべき敵から、私のいのちを守ってください。
- 2 悪を行う者どものはかりごとから、不法を行う者らの騒ぎから、私をかくまってください。
- 3 彼らは、その舌を剣のように、とぎすまし、苦いことばの矢を放っています。
- 4 全き人に向けて、隠れた所から射掛け、不意に射て恐れません。
- 5 彼らは悪事に凝っています。
語り合っひそかにわなをかけ、「だれに、見破ることができよう」と言っています。
- 6 彼らは不正をたくらみ、「たくらんだ策略がうまくいった」と言っています。
人の内側のものと心とは、深いものです。
- 7 しかし神は、矢を彼らに射掛けられるので、彼らは、不意に傷つきましょう。
- 8 彼らは、おのれの舌を、みずからのつまずきとしたのです。
彼らを見る者はみな、頭を振ってあざけります。
- 9 こうして、すべての人は恐れ、神のみわざを告げ知らせ、そのなさったことを悟ります。
- 10 正しい者は主にあって喜び、主に身を避けます。
心の直ぐな人はみな、誇ることができます。

本篇は「迫り来る危険に際して保護を求める詩」と呼ばれます。確かに、内容的に見てそのように理解できるでしょう。特徴的なのは、敵対者が詩人の見えないところで罠を仕掛け（5節）、詩人を中傷する言葉を言い広めて名誉を毀損している（3節）ということです。表面はきれいに飾られていながら、内面は狐のように人を欺く策略で満ちている（「不正をたくらみ」）。真正面から戦いを挑んでくるゴリアテのような男以上に、「見えない敵」というのは厄介です。作者がダビデだとすると、どういう出来事が背景になっているのでしょうか。

ダビデはその人生の中で何度も「裏切り」を経験しました。その中でも、Ⅱサムエル20章に描かれているベニヤミン人ピクリの子シェバの謀反は、本篇の文脈にそぐうように思います。シェバの扇動によって、イスラエル人はダビデから離れ去り、ユダの人々だけが残りました。ダビデは部下アビシャイにこのように告げています。

今や、ピクリの子シェバは、アブシャロムよりも、もっとひどいわざわいを、われわれにし
かけるに違いない。（Ⅱサムエル20:6）

この男は、ダビデに代わって王となるため、ダビデが王家の出身ではないことを言い広めていたのです（20:1）。神による召命を軽んずる人々は、シェバの言葉に翻弄され、我も我もと着いて行ってしまいました。

本篇の特徴は、1～6節と7～10節の間に、意図的に対比された表現がいくつも出てくることです。

舌	3節	→	8節
矢	3節	→	7節
射掛け	4節	→	7節
不意に	4節	→	7節

1～6節では、詩人は敵対者の陰險な策略を神に訴えています。それに対して7～10節では、祈りが聞かれ、神が敵対者を処罰してくださったことが強調されています。敵対者が広めている中傷が「矢を射る」という比喻で表されていますが、その放った矢がブーメランのように向きを変えて自分に返ってくることを詩人は表現しているようです。人間は陰で誰かの悪口を言うものですが、その言葉は当事者には隠されていても神にはすべて知られている。発せられたすべての言葉を神は吟味し、御心に適わぬものはそのまま発言者を裁く言葉として投げ返されるということです。私たちも語る言葉には気をつけなくてはなりません。

本篇のもう一つの特徴は、敵対者を表す言葉と詩人を表す言葉が、3つずつ出てくることです。

敵対者：「**恐るべき敵**」（1節）、「**悪を行う者ども**」（2節）、「**不法を行う者ら**」（2節）
 詩人：「**全き人**」（4節）、「**正しい者**」（10節）、「**心の直ぐな人**」（10節）

このような観点で見ても、64篇は「対比的な詩」と言うことができるでしょう。

さて、敵を訴える言葉の最後に、ドキッとさせられる表現が出てきます。「**人の内側のものと心とは、深いものです**」（6節後半）。詩人は、人が表面上はきれいに飾りながら内面では悪を企む現実を見て、それは誰もが小なり大なり行なっている事実だということに気づきました。私たちも被害者となる時は嫌な気持ちになりますが、加害者となったこともあるのではないのでしょうか。それらの言葉もまた、神の前には隠し果せぬことを忘れてはなりません。そして、へりくだって、自らの問題として本篇のメッセージを受け取りたいと思うのです。10節の「**心の直ぐな人**」という表現は重要です。神の御前に真っ直ぐな心で歩むとは、自らの問題に気づき、そういう自分を造り変えてくださるよう主に求めることではないのでしょうか。人を裁きたくする心が現れたら、自分自身をも内省したいと思います。